

ガラボヴォ 2018 年国際会議参加記

千本 真生

A Brief Report on the Galabovo 2018 International Conference

Masao SEMMOTO

キーワード：国際会議、南東ヨーロッパ、アナトリア、青銅器時代、ガラボヴォ遺跡、交流

Key-words: international conference, Southeast Europe, Anatolia, Bronze Age, Galabovo site, interactions

2018 年 10 月 24 日から 27 日にかけて、『Galabovo in Southeast Europe and Beyond: Cultural Interactions during the 3rd-2nd Millennium BC』というタイトルの国際会議がブルガリア共和国のガラボヴォ（Galabovo）という町で開催された。会議はガラボヴォ遺跡が発掘されてから、2018 年で 30 年という節目を迎えることを機に企画された。主催者はブルガリア・ソフィア大学で考古学研究室の教授を務めるクラスィミル・レシュタコフ氏（Krassimir Leshtakov）であり、ガラボヴォ遺跡発掘調査の責任者でもある。会議にはブルガリアをはじめ、海外 11 ヶ国（アメリカ、イギリス、オランダ、ギリシア、チェコ、ドイツ、トルコ、日本、フィンランド、フランス、ルーマニア）から研究者が招かれ、25～27 日の 3 日間で 1 本の基調講演と 32 本の口頭発表が行われた（図 1）。プログラムの終盤には、文化財としての先史時代遺跡の保護と活用について議論するラウンド・テーブルの時間が設けられた。開催に当たりホームページが制作されており、そこで発表者や発表題目、要旨などの情報を入手することができる（<https://galabovoconference2018.blogspot.com>）。ただし、今回の会議は一回限りの催しであったため、このホームページにいつまでアクセスできるのか定かではない。

会議の主な目的は、前 3～2 千年紀の青銅器時代に南東ヨーロッパと西アジアのあいだで行われていた交流のあり方について、参加者が研究の成果を発表し、意見交換をすることであった。口頭発表は 5 つのセッションに分けられ、すべて 1 つの会場で行われた。ただし、会議当日になって数名の欠席者がでたり、発表の順番が急遽変更えられたりして、当初のプログラムは変更を余儀なくされた。もとより用意されていたセッションには個別のテーマが特別に設けられていた訳でもないの、小稿ではプログラムの順序にこだわらず、テーマの近い発表をまとめて、その概要を紹介する。西アジアのアナトリアに関する発表もあったが、本誌を手にする読者のなかには南東ヨーロッパの考古学研究にはまだ馴染みがないという方も多いと思う。そ

こで本題に入る前に、会議のタイトルに掲げられているガラボヴォ遺跡とその研究上の背景について触れておこう。

ガラボヴォ遺跡の調査と研究の背景

ガラボヴォは、現在、スタラ・ザゴラ県最南部を占める

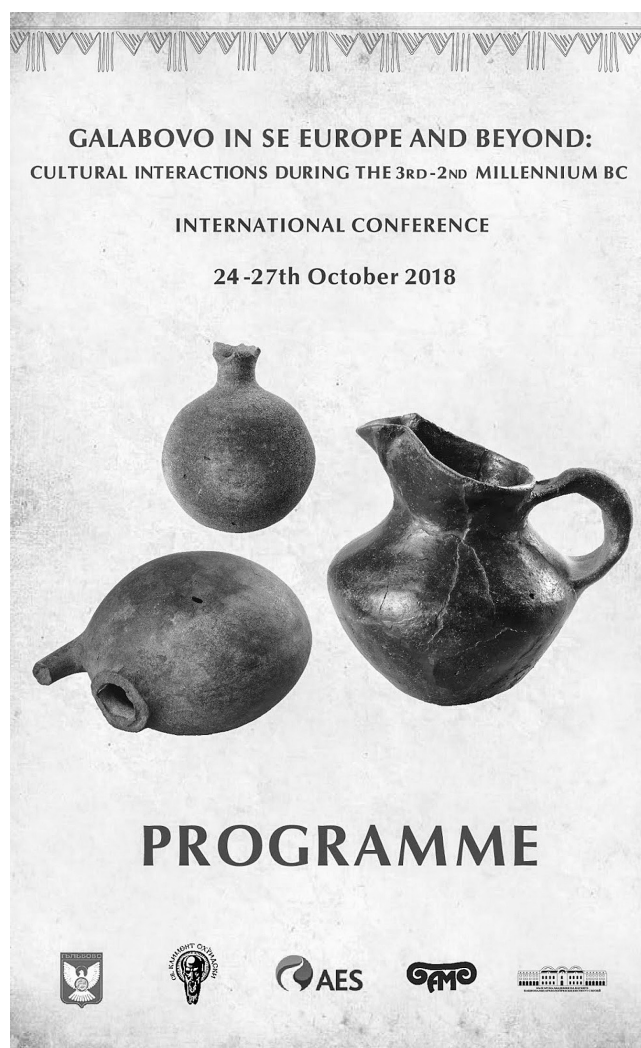


図 1 ガラボヴォ 2018 年国際会議のプログラム表紙

ガラボヴォ市の行政上の中心地にあり、首都ソフィアから東へ車で4時間ほどかかる距離にある。町の中心部にあるガラボヴォ遺跡は上トラキア平野東部に位置するテル型集落であり、地元では「アッサラ」(Assara)と呼ばれている(図2)。テルは国内最長のマリツァ川の一支流であるサズリイカ川の左岸に立地している。ガラボヴォ以東にひろがるマリツァ・イストク(Maritsa Iztok)とよばれる地区では、石炭の採掘に伴う緊急調査が1960年から行われている(Борисов 1991)。ガラボヴォ遺跡は同地区での緊急調査の一環として、レシュタコフ氏とI. パナヨトフ氏(Panayotov)によって1988~1991年と1995年に発掘された。テルの西半分と上部は発電所の工事のため調査が行われる前に削平され、テルに堆積していた中世(後12世紀)と鉄器時代の文化層およびテル周辺の遺構は完全に失われてしまった。損壊以前のテルの規模は基底部の径が150 m、高さが10 mほどを測ったと記録されている。

青銅器時代と銅石器時代の層位は、運良く工事による破壊を免れた。ガラボヴォ遺跡では、少なくとも14枚以上の建築層から成る青銅器時代層が検出されており、その最上部の第1~4層で焼失住居址が発見された(Leshtakov 2002)。そして、焼失住居址から在地系の土器に混ざって、デパス・アンフィキュペロン、シリア・ボトル、ピルグリム・フラスコ、タンカードなどといった西アジア系の土器が出土したのである。

これらの土器は前3千年紀末葉から前2千年紀初頭に年代づけられるアナトリアからの搬入土器と解釈され、注目を集めた。というのも、ブルガリアでは1990年代にはいるまで、この時期に対応する前期青銅器時代終末から中期青銅器時代にかけての様相は、ほとんど明らかにされてこなかったからである。デパス・アンフィキュペロンそのものは、1930年代にすでにブルガリア国内で発見されていたものの、その由来に関する情報については不確かな部分もあった。ガラボヴォ遺跡での発見は、当該期に上トラキア平野で人間集団が居住していた確かな証拠が、テル型集落の焼失住居という良好な出土状況からはじめて得られたという点で重要であった。

さらに、ガラボヴォ遺跡での発見は、西アジア古代都市社会と青銅器時代ヨーロッパの一地域とのあいだで、交流関係が結ばれていたことを証明したという点でも重要であった。それ以前は、黒海、マルマラ海、エーゲ海を結ぶ地図上の線の東側に、メソポタミアを中心とする西アジア古代都市社会の世界がひろがり、その西側では都市社会とは直接関係のない集団が独自の文化や社会をそれぞれ営んでいたとみなされてきたからである。

しかし、ガラボヴォ遺跡の資料は、例外的な事例として過小に評価される時期がしばらく続いた。これ以外に比較



図2 エクスカーションで訪れたガラボヴォ遺跡

可能な資料が、ヨーロッパのほとんどの地域でなかなか見いだされてこなかったことがその一因にあげられる。ガラボヴォ遺跡の年代的位置づけが搬入土器を通じて導出されていたことが裏目に出てしまい、結果的に前期青銅器時代終末から中期青銅器時代における様相の解明はほとんど進まなかった。

近年、このような状況は徐々に打開されつつある。東バルカンの国々がEUに参画してから、インフラ整備に伴う遺跡の緊急調査と ^{14}C 年代測定結果の数が増えたことにより、前2200~1500年(^{14}C 補正年代)におさまる年代値を示す遺跡の存在が報告されるようになってきた(例えば、Alexandrov et al. 2018)。また、トルコ・トラキア地方に位置するカンルゲチット遺跡(Kanlıgeçit)では、周壁とメガロン型住居を伴う前期青銅器時代集落が調査され、アナトリア系資料が大量に見つかった(Özdoğan and Parzinger 2012)。これにより西アジアと南東ヨーロッパのあいだでは、これまで考えられていたより計画的かつ大規模に交流が行われていたと考えられるようになってきた。

こうした研究史上の背景を踏まえながら、ガラボヴォ遺跡を含む既存の資料と近年発見された新しい資料に基づいて、南東ヨーロッパと西アジア間の交流のあり方を、どのように歴史的に位置づけることができるのか。課題を解決するための糸口を模索するべく、会議は初日を迎えることとなった。

会議の概要

会議の舞台となるガラボヴォ市役所は、参加者のために用意されたホテルから歩いてわずか数分のところにあった(図3)。会場はコンパクトでこぎれいな市庁舎の1階に設けられていた。会議は10月25日の午前9時に幕を開け、まずブルガリア国歌を拝聴してからガラボヴォ市長が歓迎



図3 会場となったガラボヴォ市役所

の挨拶をした。続いて主催者のレシュタコフ氏が会議の目的を説明した。そして、イスタンブール大学の M. オズドアン氏 (Özdoğan) を皮切りに、ブルガリア国立考古学研究所の H. ポポフ氏 (Popov)、ソフィア大学の F. マンチェフ氏 (Manchev)、ガラボヴォ市の北隣にあるラドネヴォ考古学博物館の P. カライリエフ氏 (Karailiev) が式辞を述べた。

開会式の直後に基調講演が行われた。上記のカンルゲチット遺跡をはじめ、トルコで数多くの先史時代遺跡の調査に長年携わってきたオズドアン氏がその役を務めた。氏が強調していたのは、前3千年紀後半に起きた社会システムの変化である。前期青銅器時代前葉の前3千年紀前半までに、西アナトリアで小規模の集落が広く分布するようになった。前3千年紀後半には大型化した集落が現れ、それと同時にメソポタミアと南東ヨーロッパをつなぐ交易路(大キャラバン・ルート)が完成した。そして、この交易路に沿って、様々な製品(例えば青銅製品、羊毛の織物やワインなど)がバルカン半島にまで運ばれるようになった。その結果、都市および都市的集落が媒体となったグローバル・システムが西アジアで形成され、トラキア地方もその周縁域としてシステムに組みこまれたと論じた。

通常の研究発表は、自然科学者による成果の発表から始まった。A. グライス氏 (Glais) は、近年、北ギリシアのドラマ平原でボーリング調査を実施し、花粉分析を通じて先史時代の植生復元を試みている。報告ではいわゆる4.2 ka イベントについて言及した。氏によれば、前2200~2000年ごろに北ギリシアでも寒冷化が進んだことは疑いないものの、ドラマ平原では人為活動が引き続き認められたことから、気候の変化が当該期の人間社会を崩壊させることはなかったと説明した。T. ポポヴァ氏 (Popova) と H. フリストヴァ氏 (Hristova) は、上トラキア平

野に位置する前期青銅器時代の集落遺跡から出土した植物遺存体を調べ、コムギとオオムギを主要穀物とした食生活が送られていたと述べた。マンチェフ氏は、ガラボヴォ遺跡から出土した土器や石器、土器に施された彩文の顔料などに岩石学的・化学的手法を適用した研究成果を紹介した。一方、考古学者である J. チャップマン氏 (Chapman) と B. ガイダルスカ氏 (Gaydarska) は、ヨーロッパで実施された4.2 ka イベントに関する生態学的な調査結果の内容が、地域によって異なっていると指摘した。そのうえで、バルカン半島で正確な景観復元を期するには、グライス氏のように一つ一つの地域や遺跡で生態学的調査を丹念に実施し続けることが必要であると説いた。

青銅器時代の編年に関しては、Z. ツィルツォニ氏 (Tsirtsoni) が、ここ5年間実施してきたプロジェクトの成果の一部を紹介した。氏は上トラキア平野と北ギリシアの集落遺跡から得られた放射性炭素年代の測定結果を示し、前・中期青銅器時代の年代的枠組について論じた。R. バジュナル氏 (Băjenaru) は、ルーマニア南部に分布する集落遺跡の放射性炭素年代値と前・中期青銅器時代の代表的な土器を段階毎に提示した。両者の発表を通じて、バルカン半島東部ではガラボヴォ遺跡以外にも、中期青銅器時代の年代値を示す遺跡の数が増えつつあることを実感した。筆者は上トラキア平野に位置するデャドヴォ遺跡 (Dyadovo) に焦点を絞って、前期青銅器時代の開始期から終末期にかけての時期区分と各段階の土器および集落プランの変遷について報告した。V. ハイド氏 (Heyd) は、南東ヨーロッパにおける前期青銅器時代の編年上の画期として、前3千年ごろのヤムナ文化の出現と、前3千年紀半ばに起きたアナトリア・コロニーの台頭に伴う社会の複雑化をとりあげ、南北からの集団移動が各段階の社会変容に重要な役割を果たしたと強調した。

ブルガリアの資料に関する発表のうち、遺構については2つの報告があった。N. ニコロヴァ氏 (Nikolova) は、前・中期青銅器時代の上トラキア平野に分布する環濠遺構を紹介した。遺構の正確な年代付けについては課題を残すが、儀礼の場として機能したと考えられている環濠の多くが前期青銅器時代後葉の前3千年紀後半に比定されると指摘した点は興味深い。M. ステファノヴァ氏 (Stefanova) は、上トラキア平野で見つかった土坑や埋納遺構から出土した遺物を示し、こうした遺構が前期青銅器時代に聖域や神祠として機能していた可能性について論じた。

遺物全般については、K. レシュタコフ氏がガラボヴォ遺跡から出土した青銅器時代資料とその類例を一つ一つ提示して、資料の年代的位置付けと地域間のつながりについて論じた。土器については、P. パヴク氏 (Pavúk) がガラボヴォ遺跡の土器からエーゲ海域に類例をもつ資料を抽出

し、ガラボヴォ遺跡第2層をエーゲ海域の中期青銅器時代初頭と併行させた。ソフィア大学の博士課程に所属している H. ヴァスィレヴァ氏 (Vassilieva) と D. デニツァ氏 (Denitsa) は、それぞれ前期青銅器時代の上トラキア平野に位置するオフチャリツァ遺跡 (Ohcharitsa) の土器組成と、ガラボヴォ遺跡の土器装飾の特徴について報告した。B. アタナソフ氏 (Atanasov) は黒海沿岸で実施した踏査を通じて得られた、後期青銅器時代の型式学的特徴を備える土器の事例を紹介した。

土器以外の遺物に関する発表は4本行われた。V. ペトロヴァ氏 (Petrova) は紡錘車と土錘に関する報告のなかで、ガラボヴォ遺跡では5~8点の土錘が一個所にまとまって数基の焼失住居から出土したと述べた。こうした出土状況は、住居内に機が存在していた可能性を暗示しており、興味深い。S. アレクサンドロフ氏 (Alexandrov) はガラボヴォ遺跡をはじめ、上トラキア平野に位置する遺跡から出土した金製リングの類例が中央ヨーロッパに数多く認められることから、前期青銅器時代終末から中期青銅器時代にかけて両地域間で交流が活発に行われていたと論じた。Z. ヴァスィレヴァ氏 (Vasileva) も金製リングをとりあげ、型式学的に分類した各類型の時空間的分布を明らかにした。L. レシュタコフ氏 (Leshtakov) は、上トラキア平野の青銅器時代前期から後期における鋳型と鋳型による金属器製作の変遷について論じた。前期から中期にかけて数少なかった鋳型が後期になると激増しており、上トラキア平野では前2千年紀後半以降に金属器製作が隆盛したと説明した。

カルパチア、アナトリア、エーゲ海域に関する発表は会議の二日目と三日目に行われた。カルパチアについては、A. D. ポペスク氏 (Popescu) が、前3千年紀のバルカン半島に出現する錫青銅製品の種類とその年代的位置付けについて試論を述べた。C. シュスター氏 (Schuster) は、ドナウ川下流域に位置するブライリツァ集団墓遺跡 (Brăilița) を構成する埋葬址の年代付けを、副葬品の土器の型式学的特徴に基づいて再評価した。N. ボロハン氏 (Bolohan) は、中期青銅器時代のオルテニア地方 (ルーマニア南西部) に分布していたヴェルビチョアラ文化 (Verbicioara) の集落と埋葬の発展過程を示した。

アナトリアの発表は6本行われた。G. サズジュ氏 (Sazcı) はガリポリ半島の西端に位置する青銅器時代遺跡マイドス・キリセテペ (Maydos Kilisetepe) の発掘調査成果を報告した。ルーマニア南部のテイ文化 (Tei) とのつながりを示す後期青銅器時代の資料が発見されており、参加者を驚かせた。M. トュルクテキ氏 (Türkteki) と S. トュルクテキ氏 (Türkteki) は、前3千年紀後葉の北西トルコに位置する集落遺跡から検出された土坑群を紹介

し、そこでとりおこなわれた儀礼行為について考察した。ブルガリア南東部に分布する同様の土坑群は集落址から離れた場所で検出されており、両地域では土坑群の立地の点で相違があることが確認された。遺物については、T. ツィーマーマン氏 (Zimmermann) が、前4千年紀のアナトリア北部および北西部における冶金技術と金属器の特徴について論じた。V. シャホール氏 (Şahoğlu) はデパス・アンフィキュペロンなどの土器の分布から、中央アナトリアのキュルテペ遺跡 (Kültepe) を拠点とした「アナトリア交易ネットワーク」が前3千年紀後半以降に南東ヨーロッパにまで展開したと論じた。D. ユルマズ氏 (Yılmaz) は、前3千年紀におけるアナトリアと南東ヨーロッパ間の相互交流を示す遺物を網羅的に紹介した。I. ガツォフ氏 (Gatsov) と P. ネデルチェヴァ氏 (Nedelcheva) は北西トルコの前期青銅器時代集落における打製石器の組成とその特徴について論じた。とりわけ組成中に石核がこれまで確認されていない点は、上トラキア平野でも同様の現象として起きており興味深い。

ギリシア・エーゲ海域に関しては、4本の発表が用意された。D. マラミドゥ氏 (Malamidou) は、エーゲ海北岸域に位置するディキリ・タシュ遺跡 (Dikili Tash) の発掘調査成果を、青銅器時代資料を中心に報告した。S. パパドプロス氏 (Papadopoulos) らは会議を欠席したため、マラミドゥ氏が代読で、北ギリシアのカヴァラ市にあるペリヤリ遺跡 (Perigialli) で検出された前期青銅器時代集落と出土資料の概要を発表した。J. G. ドゥボア氏 (de Boer) は、ブルガリアで見つかった牛皮型インゴットの紹介を皮切りに、南東ヨーロッパとエーゲ海を含む東地中海世界のワールドシステムについて論じた。L. ラームストーフ氏 (Rahmstorf) は西アジアからエーゲ海にかけて分布する規格化された「重り」の存在に着目して、統計学を用いた同定法について試論を述べた。砥石や磨き石と判断された石製品のなかに、「重り」として機能した製品が含まれている可能性を指摘した点は参加者の眼を引いた。

プログラム最後のラウンド・テーブルでは、はじめに Z. エレス・オズドアン氏 (Eres Özdoğan) と N. カルル氏 (Karul) が自ら発掘調査を実施したカンルゲチット遺跡とアクトブラクルック遺跡 (Aktopraklık) における先史時代遺跡の公園化事業と、公園の活用方法や維持管理について紹介した。遺跡公園を市民生活の一部として活用してもらう際に、研究成果を市民に紹介したり、市民に考古学を身近に体験してもらう場として機能させているだけではなく、専門家の研究と育成の場としても活用して、公園にマルチな機能を備えさせている点は、とくに印象的であった。トルコにおける組織的な取り組みの紹介を受けて、S. イグナトヴァ氏 (Ignatova) はブルガリアの現状

について報告した。トルコの事例とは対照的に、ブルガリアでは先史時代遺跡の公園化がまったく進んでいない現状を説明した。その後、ギリシアとルーマニアの事例に関する発言が続き、この二国でもブルガリアと同様の状況が見て取れることが明らかにされた。先史時代遺跡の公園化と活用をとりまく困難な状況は、ブルガリアにだけ特化した問題ではなく、バルカン半島全体で認められる共通の課題であるという認識が共有された。こうした課題を解決していくためには、より広い枠組で、少なからぬ時間をかけた議論が必要であり、その議論に考古学者が積極的に関わっていくことが肝要であるという言葉で、ラウンド・テーブルは締めくくられた。

最後に M. オズドアン氏が会議をまとめる所見を述べた。会議で発表された成果は、南東ヨーロッパとアナトリアにおける研究の確かな進展を示していたのは事実であるが、少なからぬ課題が出てきたことも確認された。とくに、氏は広域の現象を論じるときの編年の問題と、長距離交易の背景と相互交流が起きた要因の解明に取り組むべきだという。前者に関しては、今回の発表で主な舞台となったブルガリア、ルーマニア、アナトリア、ギリシアでは必ずしも統一された編年の用語と枠組が採用されていないからといって、放射性炭素年代に過度に依存することは避け、考古資料を用いた相対編年の研究をさらに推しすすめることの重要性を説いた。後者に関しては、会議でも南東ヨーロッパとアナトリア間の交流が前3千年紀後半以降から活発になったという点は共有されたが、なぜ、そうした交流が起きたのかという点については全容が明らかにされておらず、今後、学際的研究に基づく着実な取り組みがますます重要になると指摘した。

会議の所感

3日間にわたって行われた発表の内容を中心に会議の様子をきいて報告した。今回、ガラボヴォで開催された会議は、誰でも参加できるオープンな環境ではなかったものの、会議のテーマについて膝をつき合わせながら、各参加者が成果と課題を持ち寄って議論し、情報交換をするという目的は十分に達成されたと思う。会場が1つであった点も、集中して議論する上で有効だった。また、参加者はオズドアン氏やチャップマン氏といったこの道の大家から博士課程生の若手まで、幅広い世代で構成されていて、とくに若手研究者にとっては上の世代から様々な面で学ぶ機会があった点は良かった。さらに、会場や会席の場などで朝から晩まで参加者と顔を合わせていたため、個別に研究の成果や課題について話をしたり、共同研究を提案したりする機会もあった。筆者自身も、過去の調査でお世話になった研究者と旧交を温めたり、今後の計画について相談

をしたりすることができた。コミュニケーションをする機会を一つでも多く作る重要性をあらためて実感した次第である。

一方で、会議では課題も散見された。まず、議論は全体的にまとまりに欠けるものになってしまった感は否めない。各セッションには当初から特別にテーマが設けられておらず、とくに詳しい説明もないまま、漠然と5つに分けられていた。そのうえ、プログラムが唐突に変更されてしまったため、セッション後に行われた議論の方針は不明確なものになってしまった。他方、発表のなかには地域間で交流をしていたことを推定する際に、単に類似資料を挙げることに終始してしまったものもあり、交流が起きた背景の解明に迫る方法を模索する必要性を感じた。例えば、前3千年紀後半に南東ヨーロッパに現れた環壕や儀礼用とされる土坑群、集落内部に配置された倉庫や工房といった共同施設の社会的な役割を明らかにする取り組みも、その具体策の一つになるだろう。最後に、プログラムの選考についても若干言及しておきたい。今回のテーマについてより活発に議論することを目論むならば、近年重要な発見が続いている上トラキア平野西部に位置するダベネ遺跡(Dabene)の墳丘墓群、同東部に位置するイズヴォロヴォ遺跡群(Izvorovo)やビコヴォ遺跡(Bikovo)の環壕の調査を担当している研究者の発表が、プログラムに組み込まれてしかるべきであったと思う。発表者の予定が合わなかったのだろうが、当日の参加が難しければ、ポスター形式で発表をするなどの工夫をしてもよかったのではないだろうか。

とはいえ、会議には議論を促すための工夫も凝らされていた。会議の開催にあわせて、ガラボヴォ遺跡の出土資料と調査風景などの写真の特別展示が市役所内の一画で催された(図4、5)。その傍らには、ガラボヴォ遺跡から出土した土器片を手に取りながら議論をすることができるスペースも設けられていた。さらに、発表のあとには毎日エクスカージョンが実施された。初日はガラボヴォ遺跡へ赴いて2018年に調査されたばかりの調査区を見学し、2日目には2つのテル型集落の他に、ラドネヴォ考古学博物館とスタラ・ザゴラ歴史博物館を訪れた。3日目には地元産のワインを楽しみながら、全てのプログラムを終えた束の間の達成感を参加者間で共有した。小規模であったとはいえ、1年近くかけて会議の開催に尽力してくれたソフィア大学を中心とする委員会とスタッフの方々、また、このために会場を提供してくれたガラボヴォ市には謝意を表したい。

今回の会議録は委員会のメンバーによって来年度中に編集され、ソフィア大学から出版される予定である。出版を通じて会議の内容がより広く分かち合われ、議論がさらに

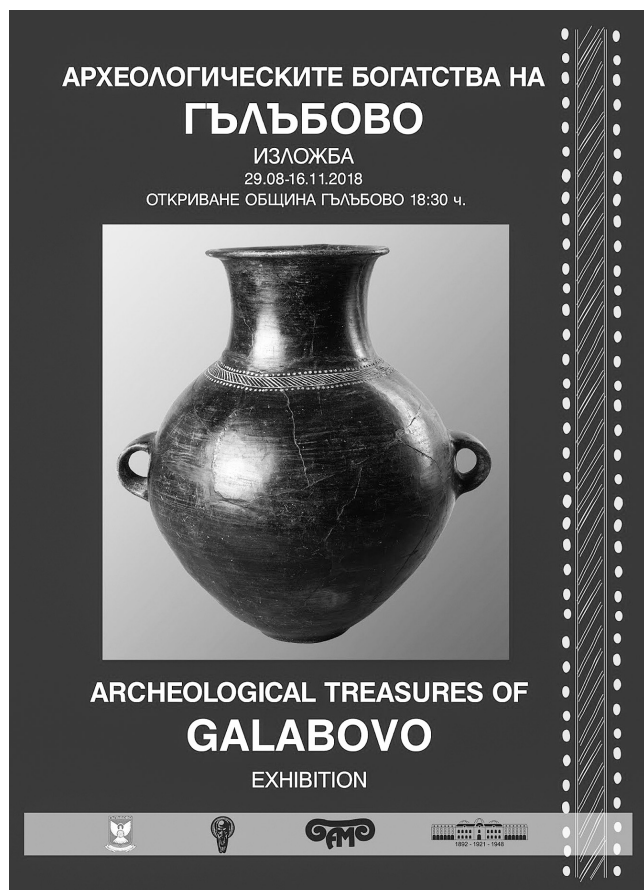


図4 ガラボヴォ遺跡の特別展示用ポスター

活性化することが期待される。先史時代に限らず、考古学研究大会のような成果を公表する場が南東ヨーロッパの国々を跨いで定期的に設けられているのか、筆者は寡聞にして知らないが、本会議のように一回きりの形式でもよいので、国境を越えた研究会合を開催し続けていくことが、南東ヨーロッパにおける考古学研究の発展につながっていくことになるだろう。最後になったが、本会議で公表した内容は、JSPS 科研費若手研究(B) (課題番号



図5 特別展示室の様子

16K21589、代表：千本真生)の助成を受けて実施した研究成果の一部である。また、本会議に参加するにあたり、平成30年度(2018年度)公益財団法人高梨学術奨励基金・若手研究助成から支援を受けたことを記して謝意を表する。

参考文献

- Alexandrov, S., Y. Dimitrova, H. Popov, B. Horejs and K. Chukalev (eds.) 2018 *Gold and Bronze. Metals, Technologies and Interregional Contacts in the Eastern Balkans during the Bronze Age*. Sofia, National Institute of Archaeology with Museum (Bulgarian Academy of Sciences).
- Leshtakov, K. 2002 Galabovo Pottery and a New Synchronization for the Bronze Age in Upper Thrace with Anatolia. *Anatolica* 28: 171-211.
- Özdoğan, M. and H. Parzinger 2012 *Die frühbronzezeitliche Siedlung von Kanlıgeçit bei Kırklareli: Ostthrakien während des 3. Jahrtausends v. Chr. im Spannungsfeld von anatolischer und balkanischer Kulturentwicklung*. Darmstadt, Philipp von Zabern.
- Борисов, Б. 1991 Състояние, проблеми и перспективи на археологическите проучвания в района на комплекса "Марица-Изток." "Марица-изток". *Археологически проучвания* 1: 13-31.

千本 真生

筑波大学人文社会系／東海大学文学部

Masao SEMMOTO

Faculty of Humanities and Social Sciences,

University of Tsukuba/

School of Letters, Tokai University